

図書館たより

号数	第72号
発行日	昭和61年3月20日
編集行	島根県立図書館 松江市内中原町52 TEL(0852)22-5725
印刷	島根印刷株式会社

昭和61年度予算

島根県立図書館長 錦織弘侃

昭和61年度の県立図書館の予算は、1昨年10月に策定された「第二次島根県読書普及振興計画」が着実に実施できるよう配慮しながら三つの主要な事業を重点に編成した。依然として厳しい財政事情のもとではあったが、主要な事業は計画どおり認められ、振興計画の推進に支障はないものと考えている。

第1は、県西部に対し県立図書館のサービスを拡充するために、いよいよこの4月から浜田市に西部読書普及センターが開設されることになった。

このセンターで行う主な業務は、①読書施設（図書館、公民館図書室等）の運営や読書普及活動について助言と援助を行う。②読書会等に対して、図書資料の利用を図ることである。このため、必要な図書資料を初年度約3万冊備え、専任の読書普及指導員を配置することにしている。このセンターの開設により、市町村における読書施設の整備が促進され、読書活動が一層活発となるよう期待している。

第2は、地域子供読書会の育成である。この事業は、59年度から継続して進めできているが、親子読書の読み聞かせで育った子供達（小学校の中学生）を対象に、地元教育委員会と県立図書館が共同で、①大字単位をめやすとした子供読書会の開設、②読書指導員やボランティアの育成、③子供文庫の開設

等を主な内容としたものである。59年度に第1期として5のモデル町村を指定したが（指定期間3ヵ年）、61年度からは第2期として、さらに5町村をモデルに指定し、重点的に指導援助を行うことにしている。親子読書とは異り、地域の組織づくりから手懸けねばならないこと。また適当な指導員が見当らない等むずかしい問題もあるが、関係者の積極的な取り組みに期待している。

第3は、図書館業務の電算化の促進である。県立図書館の機能を高め、サービスの向上を図るため、64年度からの稼動を目指して準備を進めている。60年度には、59年度購入資料の目録データを作成し、県の電算室の機械を使用して、始めて電算化による蔵書目録を作成したが、61年度では、57年度以前の蔵書及び61年度購入資料のうち、約4万冊について目録データの作成を進めると共に、導入する機種の決定を行うことにしており、その準備もいよいよ本格的な段階に入った。

これらの主要な事業以外については、ほぼ60年度なみの予算である。充分とはいえないが、予算の効率的な執行により、サービスの低下をきたさないよう配慮しながら、事業を進めて行くことにしている。

新年度事業

〈図書館資料整備〉

当館は県の資料・情報センターとしての機能を発揮するため、参考図書（辞典、各種事典、ハンドブック等）、全集・講座もの、学術・研究書や郷土資料の収集に配意してきたが、今春は松江市立図書館が新設されることとなり、ますますその色彩を強めることになった。そこで61年度は、特に参考図書に力点を置き、館内での参考業務はもとより、県内読書施設のバックアップにも対応できるよう努める。

一方、市町村読書施設への協力センターとしての機能を発揮するため、移動図書館、図書センター、読書会等に必要な読書普及用の図書を収集し、市町村における読書振興に役立てる。

〈コンピュータ導入計画〉

60年度は県の資料・情報センターとして高度な情報検索ができ、かつ市町村図書館等へのオンラインサービスも可能になるような規模での目録データを備えるため、上半期で目録データの入力テストを県電算室の機器を使って行った。この経験にもとづき、下半期は県電算室担当と打合せを重ね、目録データ入力用フォーマット（データ排列方式）を決定し、以後59年度受入の図書資料の目録データの入力作業をすすめ、そのデータを使って蔵書目録を作成した。

61年度はいよいよ64年度稼動に向けての本格的な作業を開始する。まず上半期で当館がねらう電算システムに適する機種の選定を行う。選定にあたっての条件としては、①オンライン情報検索が十分可能のこと、②貸出や資料点検など資料管理が十分可能のこと、③利用者のプライバシーが完全に保護されること、④市町村図書館などとのオンラインサービスが可能なこと、⑤将来システムのレベルアップに対応しうるような柔軟性をもっていること、などあげられる。

機種が決定されるとただちに、システムの設計に入るが、すでに導入している公共図書館がそうであるように、レディーメイドの図書館用の汎用パッケージをベースにしながら、当館のシステムに合うよう修正を行いつつ作りあげていくことになろう。（システム設計は次年度にわたる）

一方昨年度に引き続いて目録データの入力作業を行い、60年度受入分の蔵書目録を作成する。また、過去に溯って所蔵資料の目録データの入力を順次行うことになるが、61年度は館内用の図書約4万冊がその対象となる。

〈子供読書会〉

第1次島根県読書普及振興計画にもとづいて推進してきた親子読書モデル市町村指定事業は、県下全市町村へ普及という成果をもって終了し、自主活動として継続を図るとともに、第2次振興計画にのっとり、子供読書モデル町村指定事業への発展をすすめる。59年度指定の5町村は3年次を迎、61年度は美保関町、掛合町、金城町、柿木村、津和野町を新しく指定し普及を図る。

〈図書センター〉

公立図書館設置をめざしての図書センターの活動が、60年度で終了する美都町・桜江町にかわり、新しく玉湯町・川本町ではじまる。宍道町ではその機運を盛り上げるべく、県立図書館の移動図書館巡回利用の活動がはじまることになっている。県下読書普及活動の輪は、今年度も大きな広がりを見ることになる。

〈西部読書普及センター〉

61年度から、浜田に西部読書普及センターがオープンし、西部市町村の利用促進が期待される。親子読書・子供読書の指導員も配置され、従来よりもよりきめ細かい指導助言が図られることになる。

〈図書館各種文化講座〉

図書館活動の振興を図るべく開催している各種文化講座は下記のとおり継続し行う。

- 万葉集を読む会 每月第2木曜
- 出雲国風土記を読む会 每月第2金曜
- 図書館読書教室 每月第2火曜
- 親子で絵本を読む会 毎週水曜日
- 古文書を読む会（入門） 每月第1土曜
- 古文書を読む会（上級） 每月第3土曜

美都町教育委員会

昭和58年度より親子読書モデルの指定を受け、早いものでこの3月で指定期間を終えようとしている。

指定を受け、活動に入った途端、あの7月豪雨災害を受けた。この大災害により、当初の計画は大幅にぐるり、その後の推進が危ぶまれたが、保育所を中心に努力がなされ、「禍い転じて福となす」取り組みが行われた。具体的な取り組みとして、絵本の配本活動、研修会の実施を行う一方、保育所ごとに事業推進のためさまざまな工夫と努力がなされた。「親子読書だより」の発行、読み聞かせの一口感想ノート、親子による絵本選び等々がなされるなかにあって、またたく間に親子読書活動は広まっていた。道路で出合っても、「やってる」「やってるよ」といった会話が交されるまでになっている地域も出てきた。

こうして3年目を迎えた時、一つの問題にぶつかった。それは、保育所を卒園してからの読書活動をどう進めるかということだった。保育所を卒園した児童を持つ母親等と話しているうちに、子供読書会をやって見てはといふことになった。県立図書館より指導を受けながら2つの地区において活動が始まられた。まだ始めて1年目なので内容的にはまだまだ不充分ではあるが、絵本を題材として、パンづくりやハイキングを行ったりしながら取り組みが進められている。

わずか3ヶ年の取り組みではあったが保護者も私達多くの勉強をさせられた。一冊の絵本を読み聞かせることによりとても大事なものが親子間に芽ばえてきているように思われる。この3ヶ年の活動の成果と課題を明らかにし、さらに読書活動を活発化させようということで、この3月30日には、美都町読書振興大会を開催することになっている。また、美都町図書センターも4月より町立図書館として地域の読書活動を進めて行く予定である。

まさに1冊の絵本が私達に大きな勇気と希望を与えてくれた。

頓原町教育委員会

1冊の絵本を仲立ちにして、親と子がふれあいの場をもてないだろうかと考えていたところ、幼児期の人づくりの一環として、昭和56年乳幼児学級が開設された。この中に親子読書活動を組み入れることにした。当初は少ない蔵書数で「読み聞かせ」することによって子供に与える心の豊かさ、を理解してもらう2年間だった。

昭和58年、親子読書モデル町の指定を受け活動も更に充実してきた。先ず児童図書の整備と、推進体制の充実に力を入れた。図書購入の町予算の増額に伴ない、児童図書を整備し、県立図書館から借りた絵本とで各保育所へ、週1回配本を始めた。又、保育所の全職員への研修や中央講師を招いての講演会を行い、指導者とボランティアの養成に努めた。

2年次には書店・若妻会からの図書の寄贈が相つぎ、活動が浸透してきた。保育所で親子読書を経験した子供が小学生となり小学校でも読書活動を導入することになった。学校の協力により朝の15分「さわやか読書」とし始業前の15分間に読書の時間に位置づけた。又、学級文庫の充実と従来の地域文庫を発展させて各地区に「ふれあい文庫」を設置した。毎月第一土曜日は「家庭読書の日」とし家族ぐるみでのふれあいがもたられるようになった。

3年次は全小学校に読書活動が導入された。乳幼児から小学生までの読書活動の広がりが着実に展開される中で、親子読書・子供読書の共通目標である子供の心を育てるために読書グループが誕生した。小学校PTAママさんが中心となり、子供グループは「杉の子会」、母親グループは「若杉会」とし、会員制で自主活動をしている。

3年間の活動のまとめとして2月21日に「読書普及振興大会」を開いた。小学校PTAからの体験発表の中で小学生の読書活動では中・高学年の親子読書のあり方に課題があるよう問題提起がなされた。

保育所を中心に親子読書を普及してきたが、定着してきたこの活動を基盤に小学生においては地域に根ざした読書グループを育成し「子供読書」が盛んになるよう今後指導・援助をしていきたい。

心を育てる読書 その2

こぐま社社長 佐藤英和

〈読み聞かせは心のあそび〉

絵本を読んだり、お話を聞いたりする中で子供たちの心の中に何が起こるのでしょうか。それは、心が動くのです。驚いたり、喜んだり、怖いなあと思うのです。心が動くということは、心が育つということです。動かない心は育っていかないのです。

本を読んだら物知りになる、知識がふえるということを考える人があります。それも確かです。しかし、幼い時に子供たちが本を読んで物知りになることが大事なわけではありません。子供たちが絵本やお話で心を動かしながら楽しむことが大切なのです。

子供たちは、主人公の体験や経験を自分の体験や経験としながら、生きていくということがどんなことなのかを体得していくのです。これがふしぎなことなのです。自分が現実体験することではありません。お話を聞いたり本を読んだりする中で、私たちは、主人公と一体化して主人公のする経験をほとんどしてしまうのです。だから一冊の長い話を読み終えた時には、何だかとても長い旅をしてしまったよう思うのです。お話の途中にはさまざまなことがあります、やはり結末は明るいのです。そうすると希望を持つことができるのです。

登場人物の心の動きに共感しながら、その主人公といっしょに生きていくということは、自分以外の人といっしょに生きるということになるのです。主人公の内的な経験と自分の内的な経験を重ね合わせるということは、人の気持ちがわかるということです。いっしょに喜びも悲しみも共有し共感することができるということです。お話をたくさん聞いたりよい本をたくさん読んだりしている中で、その子供の内的な経験が豊かになると同時に、他の人の気持ちがよくわかるようになっていくのです。幼い時からこのような経験をしていれば、人をいじめるとか、暴力を振るうなどということは起こらないと思います。私たちは、ほんとうに悲しみを共に負い合い喜びを共に分け合う子供たちを育てたいものです。

特に幼い者たちの文学のもっている特質として、幸せ、温かさ、信頼の大切さ、生命の大切さがあげられます。幼い時にこういうよい文学に出会わることによって心が育っていくのです。

〈見えないものを信じるしあわせ〉

またお話の大切な働きは、自分が目に見ることができないもののふしぎさを信じることができるということです。松岡享子さんは、「サンタクロース」を信じることの大さを言っておられます。子供の時は、サンタクロースをだれもが信じるのです。しかし、いつの日か子供たちの中から去っていきます。サンタクロースはだれかを知るようになった時に、確かにその子の世界から消えていくのです。しかし、サンタクロースを信じていた、サンタクロースを待っていたその心の部屋というものは残っているのです。子供たちによい文学を出会わせることの大さな点だと言っておられます。私たちは、このような心の空間を多く作ってやりたいと思います。

〈絵本の読み聞かせは家庭の中で〉

私たちが絵本をとおして考えておきたいことは、多くのすばらしい絵本が家庭の中で生まれてきたという歴史があることです。世界中で有名なちびくろ・さんぽは、お母さんが絵入りの手紙を二人の子供にせっせと送った中から生まれたのです。また、ピーターラビットは、ポーターさんが若い時に家庭教師をしていた子供に書き送った手紙が、もとになっているのです。これは、もとの手紙まで文献に残っています。このように幼い子供のためその周りにいる大人たちが心をこめて送った贈り物、それがだんだん広がっているのです。何とすばらしいことでしょう。家庭の中で生まれた絵本は、家庭の中で読まれることが一番ふさわしいのです。もちろん、幼稚園や保育所で読まれることも大事だと思います。しかし、やはりお父さん、お母さんのひざの上で聞く時に、子供は一番安らかな心で聞くことができます。

〈よい本に出会わせる人に〉

子供たちのことばは、聞くことによって育ち、やがて話をすることができるようになります。絵を読むようになります。心ことばが豊かに深くかかわってくるわけです。心が豊かな人は、豊かなことばによって育つののです。豊かな文学の世界をことばをとおして出会わせていくことが大切です。子供たちは、よい本やよい話に出会った時、心が躍り感動し、心が育っていくのです。本を作る側の私とみなさん方と手をつないで、子供によい本を出会わせたいものです。

〈文庫活動〉昔話を集めて

邑智郡瑞穂町高原親子読書会

井上栄美子

「おかあさん、むかしむかし、して」また始ました。昔話より本を読む方が好きなのにそんな気持ちを押えて、「むかしむかしある所におじいさんとお婆さんがいました」いつも変りばえのしない「桃太郎」や「さるかに」それでも子供たちは黙って聞いています。2才半の3女もすっかり話を覚え込むほどです。今夜は、少し変った話をしてやりたいと思ってもレパートリーはせいぜい10位。「やっぱり」私の頭の中に、去年秋桜江町で行われた講演での講師の先生の言葉が浮んできました。「今の若いお母さんは昔話を知らない。知らないから子供に話してあげない。だから今の子は昔話を知らない」と指摘されたとおりだな……。

このことを会に出て話すと、どのお母さん方も「きまった話しか知らんね」と昔話をあまり知っていないことに気付き、早速、「おはなしのろうそく」(東京こども図書館編)「日本昔話」(岩波書店)を買って回し読みを始めたのですが、なかなか自分のものになりました。そこで、もっと身近な話を集めては、高原のことを知るにもいいチャンスかもしれないと話が進み、今年の1月から5月にかけて高原地区のお年寄りの方を尋ねて話を聞かせてもらうことにしました。

お年寄りの方は、尋ねて行く日を心待ちにして下さり、「これはいいことをしんざる」と励まして下さったり、「私は、あまり知らんから○○さんに聞いてきてあげよう」と言われ、話を紙に書いて渡して下さったり、「○○さんとこへ行ってみんさい、よう話を知つとりんさるけえ」と指導していただきました。なかには言い伝えを物語に書いて下さったお婆さんもおられました。本当にどの方もよく話を知っておられ、次から次へと泉のように話が飛び出し、ゆっくり話される口調の中に歴史のあつみ、やさしさ、暖かさを感じました。普段ゆっくりお年寄りの方と話をする機会がなかったのですが、昔話という共通な話題を持って話ができたことがとても良

かったと思いました。そして、この生きた遺産を宝物として、親子が共に話しあえる時間を少しでも多く持たなければいけないと痛感しました。集めた昔話は31話、遊び唄12でした。集めている時のエピソードに、こんながありました。あるお母さんの話に、「私が話を集めるのに一生懸命になっているのを見てか、子供たちも昔話に興味を持ち、借りて帰る本も昔話が多くなったんよ」「会でした遊び唄を家で歌っていたら、おじいさんやお婆さんが懐かしがって一緒に歌って下さったんよ」

4月に年間計画を立てる時、子どもたちに「何かしたい、何をして欲しい」という質問に「お母さん達が集めている昔話をして欲しい」「昔話をペーパーサー

トや劇にしてみたい」と答えが返った時、やって良かった子どもも親の姿をよく覗っているのだなと教えられました。話を集め終えた頃、公民館の方から、「本にしてみませんか。」と声をかけていただきました。それで集めた話をめいめいに分けて清書し、何回も書き直しているうちに話が次第に自分のものになりました。さし絵を子供たちに協力してもらい、12月にやっと印刷にまわしました。

今、5年生が中心になり「桃太郎」の台本を書き3才から5年生までが自分のなりたい役を決めて役づくりに張り切っています。「桃太郎」に決まったのは、小さい子もよく知っている話がいいと5年の配慮からです。こうした縦のつながりを大事に親子共に育っていきたいと思っています。

あ と が き

昨秋、「読書週間」にちなんで「読書体験記」を募集しましたところ、多数のご応募を戴き厚くお礼申し上げます。そのうちから1編を掲載させていただきました。他の入選作品は「島根読進協第13号」に掲載させていただきました。

さわらび読書会

石ばしる垂水の上のさ蕨の萌え出づる
春になりにけるかも 志貴皇子 万葉集

私達のさわらび会は昭和47年図書館主催の読書会を原点とし、52年4月この教室の卒業生がさわらび読書会を結成しました。自主運営で現在に至っています。この会の主旨は年令性別を問わず読書を愛する心があれば何時でも誰れでも入会出来、会員相互の立場は全く平等で読書を通して人生や人間性について語り合う会です。

テキストは会員相互の推選により選択しています。角国俊顕先生を顧問会員とし、毎月第2水曜日午後市立図書館にて例会を持ち、年1~2回の文学散歩、会誌「さわらび」を発行しています。又会員の融和をかねて新年会、花見会を行い、お世話になった方々を招待し大いに親睦を温めています。

現在迄に読了したテキストは170冊、2月例会では科学者にして芸術的感性豊かな「寺田寅彦隨筆集」を読み感銘を受けました。今迄は文芸作品が多く、今後は紀行文・隨筆・自然科学関係・文芸物でも外国、ことに中国・朝鮮半島の作品をとり上げたいと思います。昭和58年から長期課題の「源氏物語」を併読しています。この会が10年余も続いたのは格式ばつた規約・役職など無く、本当に読書の好きな人達の集まりで、自由な発言と語り合いの場で言葉を大事にし、古典得意とする人、朗読の上手な人、自然科学を愛好する人、短歌に堪能な人達がそれぞれ個性を發揮し、良識ある自由な雰囲気で読書活動をするのがこの会の特色です。現在正会員10名で新入会員の加入を待っております。

60年に石田真佐恵さんの原爆体験記『核戦争の恐しさを知って下さい』が山陰中央新報に掲載され、更に8月15日原爆記念日にNHKテレビで全国に放映されました。秋には念願の奈良飛鳥地方へ旅行し法隆寺に始まり古寺巡礼、古墳群を尋ね、古檜の丘に登り大和三山を眺望し、万葉の昔を偲びました。今年度は風の王国(五木寛之)幻人詩抄(江川波夫)を読む予定です。先日は県読進協より表彰を頂き誠に光栄に存じます。これを励みにますます読書に精進したいと思います。

浜田市 代表者 中村和子

朝日婦人学校読書会

此の度島根県読書推進運動協議会より表彰して頂きました有難うございました。

昭和50年、朝日婦人学校読書会として会員22名で発足しましたが年を追うて増え続け現在39名の大世帯となりました。運営は年会費1人500円徴収し、婦人会本会計より10,000円助成金を頂いています。

1~2ヶ月に1回読書会を開いています。会員の年令層が厚いので、ものゝ見方、考え方も幅広い発言が相つぎ大へん参考になります。会の特色は

1. 時折話題の新刊書を会員に相談して15冊単位に買い求め回覧し、其の後、半額で売却しますが希望者が多く抽選で決めることにしています。

1. 朝日婦人会々報『婦人あさひ』はこの会の話合いの場で生れ、此の3月に第16号が出来上りました。(年2回発行)

1. 年1回名作の舞台となった所や名勝旧跡を探訪する日帰り旅行をしています。この旅行は非常に人気があり会員の定着・増加の一因になっているように思われます。昨年はテレビドラマ夢千代日記の湯の里温泉を探ねました。夢千代が歩いた赤い橋や清

流は5月の陽光に煌いていました。皇太子殿下御夫妻がお泊りになられた由緒ある旅館で昼食をとりながらの話合いはまた格別のものでした。

夢千代の湯の里けむり風薰る (隆女)

ふき一束沈め峡の湯客まばら (美也子)

夢千代の像に湯けむり渓若葉 (千代女)

1. 朝日公民館には謡曲教室、俳句会、女性コーラス等文化サークルが催され、これらのサークルも会員が多く活躍しています。地域にしっかりと根を下した文化活動の中心的存在に成長した読書会を誇りに思っています。

松江市 代表者 堀 美也子

昨年の秋、読書週間に全国の読書推進運動協議会より木次町の「城名樋会」が表彰されました。全国の「読推協」にグループ紹介される予定です。

昭和60年度郷土資料新着図書

0. 総記

図書館利用の手引 県高等学校図書館研究会編刊

1. 哲学・宗教

筑陽神社誌 太田一雄著 筑陽神社

出雲神話マンガシリーズ1, 2 山陰中央新報社

1. スサノオ 2. オオクニヌシ青雲編

ふるさと多伎町の寺でら 多伎町仏教会編刊

南虎室宗徹老師を偲ぶ 原田弘吉編 万寿寺

2. 歴史・地理

西石見の豪族と山城 広田八穂著刊

古代出雲王権は存在したか 松本清張編 山陰中央新報社

荒神谷遺跡銅剣発掘調査概報 県教育委員会編刊

原出雲王権は存在したか 速水保孝著 山陰中央新報社

出雲王朝は実在した 安達巖著 新泉社

銘文入大刀の世界 八雲立つ風土記の丘編刊

松江城物語 島田成矩著 山陰中央新報社

風土記時代と律令の東出雲町 長瀬学栄著刊

三刀屋氏とその城跡 三刀屋城跡調査委員会編刊

上納紙制度と紙漉哀話 津和野歴史シリーズ刊行会

史料県令籠手田安定1, 2 鈴鹿敏子編刊

尼子一門のルーツ 横山正克著 立花書院

松江／わが町 漢東種一郎、福田茂宏著 今井書店

郷土誌ふるさと秋鹿 刊行委員会編刊

ひがし郷土誌 平田市東公民館編刊

宇賀の宮里 大福盛蔵編刊

高瀬山麓と附近の集落 福島金次郎著刊

躍進長浜 浜田市長浜自治会編刊

江津の店 江津の歴史と観光 七田真編刊

慈愛の里 匹見写経会編刊

丸茂の昔と今 美都町丸茂老人クラブ編刊

3. 社会科学・教育

島根県警察史 昭和編 県警本部編刊

海に生きる浜田明るい未来を開こう 梨田精著刊

村を支えた議員たち 新屋俊多著刊（瑞穂町）

多様なる未来 地域総合研究所編 島根県

平田市連合婦人会30年のあゆみ 平田市連合婦人会

法人設立20周年記念20年の歩み 浜田社会福祉協議会編刊

自治労島根県本部30年史 自治労島根県本部編刊

島根県評30年史（上下） 島根県評編刊

いなほ一開設10周年記念誌 小山園編刊

島根の定通教育 県高校定時制通信制教育振興会

研究授業という奴 中原健次著刊

35年の歩み 県小学校長会編刊

My Onken History 島大音研編刊

サクラ読本追想 藤富康子著 国土社

島根県の教育史 内藤正中著 思文閣出版

創立50周年記念誌 出雲農林高校編刊

佐世乃木 佐世小学校編刊

島根医科大学開学10周年記念誌 島根医科大学編刊

山むらさきに 本田秀夫著刊

騎兵第百十大隊史 刊行会編刊

青春と楊柳一満州会 史記編さん研究会編刊

想い出桜と錨の男たち 島根錨会編刊

4. 自然科学・医学

宍道湖の自然 佐藤仁志編 山陰中央新報社

宍道湖抒情 川本貢功著 くもん出版

山陰のくらしと気象の暦 '86 日本気象協会編刊

島根県の地質 島根県編刊

しまねの草花 丸山巖著 山陰中央新報社

草わけの保健婦養成 県立保健婦専門学校編刊

玉造厚生年金病院四十年史 玉造厚生年金病院編刊

5. 工学・家事

ピカ一益田からのヒロシマ・ナガサキー 益田市原爆被爆者の会編刊

玉鋼の杜 安部正哉著 金屋子神社

津和野・四季の味 池田吉介著

6. 産業・交通

島根県地価ハンドブック '85 県地域対策課監修

日本不動産鑑定協会島根県部会

出雲市土地改良区30年誌 出雲土地改良区編刊

山陰の鉄道建設史 亀井正夫編 美保土建

7. 芸術・スポーツ

一老美術学者相見香雨の回想 森山時雄著刊

島根の彫刻1, 2 県文化財愛護協会編刊

晴木親久画集 晴木親久著 晴木光刊

島根の高校演劇40年のあゆみ 県高校文化連盟編刊

島根の競技力 県体育協会編刊

島根県野球連盟史 県野球連盟編刊

8. 語学

方言談話資料8（横田町大馬木）国立国語研究所

9. 文学

孤独地獄—森鷗外— 吉野俊彦著 PHP研究所

浜田歌壇昭和史 堀松太郎著刊

石見神楽 山陰中央新報社編刊

ボクちゃんの戦場 奥田継夫著 理論社

緋駒一隨筆集 大庭良美著刊

私の町の町民憲章に「心身ともに健康な若い力を育て、教養と文化の町をつくります」の一項がある。社会教育は、この憲章の具現化を図ることにあり、昭和56年には佐田町立図書館を開設、昭和57年には地区移動図書館、昭和58年には学校移動図書館を開設しました。

佐田町は旧村の須佐地区、窪田地区の2地区から成っております。この二地区16ステーションを毎月2回巡回します。車はライトバンを使用し、1回の移動図書冊数は350～400冊です。巡回日程を前もって町広報紙で知らせ、さらに有線放送を通じて周知をし、図書館を9時に出発します。帰りは4時頃になります。

今年でこの移動図書館も4年目を終ろうとしています。4年の間にはそれぞれのステーションで読まれる本の傾向もだいたい把握でき、顔馴じみもできました。「寒いけん、お茶飲んでいきなはいや」「今度〇〇の本持つて来てごしなはいよ」とか、小さな子供達からは「移動図書館のおばちゃん、紙芝居持つて来る」と声をかけられたりすると、かかる本の重さなど忘れてしまいます。時には、道を歩いているお

ばあさんを車に乗せ送り届けることもあります。読書普及の活動はまず町民の人々と親しくなること、図書館や移動図書館の存在を知ってもらう事が大切だと思います。

今後の計画として、町内の各企業主に協力を求め休憩時間等に合せて移動図書館を開き、平日、図書館になかなか来れない職場で働く人達への読書普及にも力を入れていきたいと考えています。佐田町の人口の高齢者が占める割合は17.5%です。今、進む老齢化社会への対応が社会教育行政の大きな課題となっています。このように高齢者が多く、図書館までの距離も遠い農山村地帯では移動図書館(出かける社会教育)こそが読書普及を進める唯一の道です。これからも活動の継続を図っていきたいと思います。移動図書館業務を毎月の行事に終わらせることなく、回を重ねるごとに地区へ浸透するようにしたい。より多くの人に読書の楽しさを知ってもらい、住民と密着したきめ細かい図書館サービスを目指しがんばっていきたいと思います。

わが町の自動車巡回⑧ 佐田町教育委員会

NEWS

市町村読書普及研修会二会場で開催

去る2月6日は県立図書館で、19日は益田の勤労青少年ホームとの二会場で研修会が開かれた。各市町村の読書普及に携わる指導員や教育委員会職員等170名の参加があった。今年度は親子読書モデル事業終了にあたって、午前中はこの事業のまとめとこれからのあり方について協議をした。午後は子供読書の現状と普及計画について話し合い、そのあと実践的活動に役立つよう手袋人形や折り紙の教材づくりに精を出した。

図書館読書教室講演会

図書館読書教室のまとめとして去る2月18日に集会室において、島根大学助教授内田賀徳先生を講師に「ことばの深み—日常のことばと文学のことば—」という演題で講演会を開催した。身近かな絵本や詩や小説の中から多くの事例をひきながら、日常のことばとのかわりや違いなどについての講演に、参加者一同日本語の深みを改めて考えさせられた。

島根県公共図書館職員研修会を開く

去る3月6日、大田市民センターで図書館等読書施設関係職員を集め、読書施設の円滑な運営と読書普及活動を積極的に推進することを目的に職員研修会が開かれた。午前中は読書活動をすすめるための読書会活動や移動図書館の現況や課題についての発表があった。午後は全国で行われる公共図書館各種研究集会の報告があった。参加者全員、今後の活動へむけて意欲を新たにした。

図書館協議会、新役員きまる

2月26日、図書館協議会の新役員を迎えて、新年度予算と事業計画について説明があった。来年度は新たに子供読書のモデルが5町村指定され、読書普及がますます浸透していくことになる。委員からこれからも読書普及に力を入れてほしいとの意見が出された。新委員は次のとおり

曾田 寛(学校代表)	塔間 武(学識経験者)
江角 あき(社会教育関係団体代表)	半田 浩()
中本 辰夫(社会教育委員)	森脇 哲夫()
音羽 融(公民館運営)	山本 黙()
青山 善平(学識経験者)	田中礼次郎()